



海外作家賞 / アン・フェラン(Anne FERRAN) = オーストラリア・シドニー在住

1949 (昭和24) 年、オーストラリア・シドニー市生まれ。ニュー・サウスウェールズ大学ファインアーツカレッジ修士課程修了。女性の性と表象の理論に影響を受けた「Carnal Knowledge」展('84年)、「Scenes on the Death of Nature」展('86年)で写真アーティストとして評価を確立しました。  
 '99年、女性精神病院の写真アーカイブ「INSULA」「1-38」展を発表。2001年から、19世紀半ばに女性が働く工場や女性服役者の監獄だった跡地、中央タスマニア地方の小さな村を撮影した「Lost to Worlds」シリーズを制作。土地がもつ記憶をどのように写真で解き放つことができるのかを問いかけています。オーストラリアを代表するアーティストの一人。

<近年の主な個展>  
 「Backwater」(2006年、Stills Gallery (オーストラリア・シドニー))、「Any Body」(2004年、Sutton Gallery (同、メルボルン))、「1-38」(2003年、Stills Gallery (同、シドニー))、「INSULA」(同年、SCA Gallery (シドニー大学美術館))など。

<近年の主なグループ展>  
 「The Ground, The Air」(2008年、タスマニア美術館ギャラリー (オーストラリア・タスマニア))  
 「Reveries: Photography & Mortality」(2007年、ナショナル・ポートレートギャラリー (同、キャンベラ他))など。

<主な出版物>  
 「Anne Ferran」, exhibition catalogue (2009年、タスマニア美術館ギャラリー)、「Lost to Worlds」, exhibition booklet, 2001

<受賞歴>  
 Clemenger Contemporary Art Award (2006年、National Gallery of Victoria)、Gold Coast Ulrick Schubert Photographic Art Award (2003年)



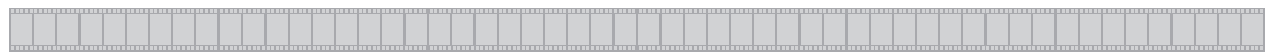
「#11」2003年(シリーズ「1-38」より)



「#27」2003年(シリーズ「1-38」より)



「Untitled (christening robe)」2001年(シリーズ「Flock」より)



国内作家賞 / 柴田敏雄(しばた・としお) = 東京都内在住

1949 (昭和24) 年、東京生まれ。東京芸術大学美術学部(絵画科油画専攻)修士課程修了。'75 (同50) 年、ゲント市王立アカデミー写真科(ベルギー)に留学。  
 '80年代からダムやコンクリート堰(せき)などの人工的構造物を写した写真を発表。'90年代、シカゴ美術館のコミッションワークとしてアメリカで撮影活動し、抽象的で幾何学的な構成の中にダムなど巨大建造物を収めた作品を発表。「ランドスケープ」を独特の視点からとらえ、高い評価を得ています。

<近年の主な個展>  
 「ランドスケープ—柴田敏雄展」(2008年、東京都写真美術館)、「Color works」(2007年、ギャラリー・ルイノッティエ(米国カリフォルニア・サンタモニカ))、「Work : Man」(2007年、ツァイト・フォトサロン(東京))、「Waterfolio」(2006年、双ギャラリー(同))など。

<近年の主なグループ展>  
 「水の情景—モネ、大観から現代まで」展(2007年、横浜美術館)、「Joy of color」(2007年、ローレンス・ミラー・ギャラリー(米国ニューヨーク))、「Les peintres de la vie moderne」(2006年、ボンビドー・センター、仏国パリ)など。

<主な出版物>  
 「DAM」(2004年、Nazraeli Press、(米国))、「VIEW」(光琳社刊)、「TERRA」(都市出版社刊)、「日本典型」(朝日新聞社刊)

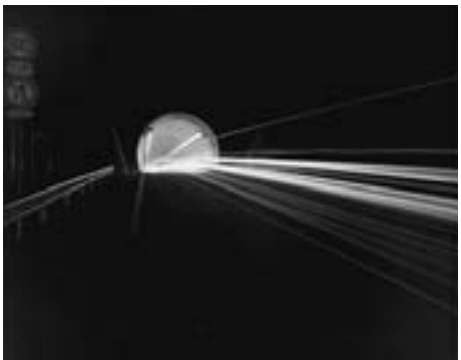
<受賞歴>  
 写真家協会賞作家賞(2009年)、第17回木村伊兵衛写真賞(1992(平成4)年)



「福島県相馬郡鹿島町」1990年



「グランド・クーリー・ダム、ダグラス郡、ワシントン州」1996年



「逗子市 湘南道路料金所」1982年

<受賞者敬称略>

のトーンの美しさでまとめた「日本典型」シリーズで木村伊兵衛賞を受賞。近年は海外での制作発表が続いていました。

昨年の新シリーズ「ランドスケープ 柴田敏雄展」(東京都写真美術館)が国内初の美術館回顧展。

「さまざまな人工構造物をとらえたモノクロームの繊細なコントラストによる表現から、近年のシリーズは柔らかな色彩への感応として広がった。この新シリーズで受賞となったことは、タイムリーであったと言えるかも知れない」(佐藤氏)と評しています。

**新人作家賞に石川直樹氏**

人類学、民俗学などへの関心を元に行方の経験としての移動、旅などをテーマに作品発表し活動を続けています。

「東川賞の中でも特に重要なパートである。それは、賞によって新人を見いだすこと。その未知の可能性を見極める『選ぶ側』が試されるからであろう。近年猛烈なほどの展覧会や出版の活動、その受賞歴からみれば、すでにポピュラーであり、むしろ他の新人を、という声もあった。しかし、石川氏の活動はそんな議論をも超越して活発であり、受賞を妨げる理由はない。学生時代、冒険家としてスタート、大学院入学後から写真家として極地体験を写真で視覚化し、文化

人類学的な興味からさまざまな地を旅して撮影を続けている」(佐藤氏)と高く評価されました



シリーズ「POLAR」2007年より



シリーズ「POLAR」2007年より



「ルヲマナイ」2007年(シリーズ「ON\_沙流川」より)



「ボロトカン」2008年(シリーズ「ON\_沙流川」より)

特別賞には露口啓二氏

札幌を拠点に活動しています。「ON\_沙流川」と題された写真では「沙流川」と言えば故菅野茂氏の平取町の傍ら流れ、物議を醸した二風谷ダムを抱えるなど、アイヌの文化に興味を抱い

ていればピンとくる地名であろう。写真には特別ではない原野や湿地帯の部分が写っている。露口氏は、地名の語源を調査し、その語源に関係する地形を現場の風景に見いだして撮影した。さらに時間をかけて同じ場所から別の角度を撮影するなど、その地名をめぐる時間や空間の再構成についての熟考によって制作された作品である。北海道はもとも先住民たるアイヌの地名から成り立っている。その事を事実として知っていても、日常からは遠ざかっている。こうしたテーマで写真がとり続けられる事によって、我々はその埋もれてしまう歴史を知る事が可能になる。」(佐藤氏)と評されています。



本年度審査委員会は、今年3月末、東京都内で開かれました。長年審査委員を務めてきた写真キュレーター山岸亨子氏が退任。代わって写真家山崎博、批評家楠本亜紀の両氏が審査委員に就任し、8人の委員で審査が行われました。